

## 豚がキャベツ畑で見た夢は 戦後の飢餓地獄と歌笑漫談

焦土の上を「リンゴの唄」が流れた敗戦直後の日本。国民のほとんどが飢餓線上をさまよっていた。

巷には「日本人一千万人餓死説」が流れ、人々は神にすがるようにヤミ市に殺到した。飢えは「明日の夢」を描く力を失わせ、ただ、その日その日を生きのびるのが精いっぱいだった。そんな時節、餓鬼のような人々の心に灯をともしべく、独特の話術で日本中に笑いをふりまいた男がいた。

その名は三遊亭歌笑（三代目）。人気の絶頂にあつた昭和二十五年五月三十日、銀座で交交通事故に遭い、急死した。

彼の漫談のユニークな特徴になっていたものに、話の随所にはさむオリジナルな「戯れ唄」があり、例えばこんな調子

\* \*

豚の夫婦がのんびりと

夫の豚が目をさまし

いま見た夢はこわい夢

畑で昼寝をしたとき

女房の豚にいったとき

おれとお前が殺されて

こんがりカツに揚げられて

みんなに食われた夢を見た

女房の豚が驚いて

あたりのようすを見るならば

いままで寝ていたその場所は

キャベツ畑であつたとさ

\* \*

敗戦直後の飢餓地獄の中で、よほどの恵まれた人間でなければ、トンカツにありつくことなど夢のまた夢だった。そんな夢を、豚自身がカツに揚げられた夢を見たという、逆説的なミステリー仕立てにしてみせるところが歌笑の異才。当時の飢餓感の深さがひしひしと伝わってくる。

それにしても、暖衣飽食の当節、こんな胸を打つ戯れ唄が生まれないのは何故なのか。飢餓から解放されると、感性も鈍るのか。

